

Title	福沢百助著『果育堂詩稿』(一)
Sub Title	The translation and notes of Koikudo (A collection of poems written by Hyakusuke Fukuzawa) (I)
Author	佐藤、一郎(Sato, Ichiro) 『福翁自伝』を読む会("Fukuo jiden" o yomu kai)
Publisher	三田史学会
Publication year	1980
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.50, No.記念号 (1980. 11) ,p.105- 122
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	国史 第五〇巻記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19801100-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福沢百助著『果育堂詩稿』

(一)

佐藤一郎訳注

『福翁自伝』を読む会 補注

序

福沢諭吉の父百助（諱は咸かん、字は少山しょうざん、号は百助ひやくすけ）は、中津藩士兵左衛門の長子として寛政四年（一七九二）に誕生、天保七年（一八三六）に同藩の大坂蔵屋敷において数えの四十五歳のときに急逝した。これは徳川家斉の治世の六年目から、ちょうどその治世の最後の歳までの間である。

寛政四年とは、林子平が『海国兵談』を著して外国のことを論じた咎により禁固せられた歳であり、清末の危機を予感した大詩人龔自珍の誕生の歳であり、乾隆も最後に近く五十七年を数える。天保七年とは、九州学界の重鎮龜井昭陽が死去した歳であり、また天保の飢饉のまつただ中にあって幕藩体制が大きく揺ぎはじめた歳である。大坂の陽明学者大塩中斎の乱が起ったのは、その翌年の天保八年二月のことである。

百助の幼少時代は、諸藩における藩校設立がブーム状態を呈したときと重なる。「中津藩主奥平昌高、進脩館を創立し、倉成竜渚・野本雪巖を教授となす」（斯文会編『日本漢学年表』）との記事は、寛政八年（一七九六）の項に見え、R・Pドーア著松居弘道訳の『江戸時代の教育』（岩波書店刊）では「一旦学校が一般化すると、流行の勢がその普及を助けた。一七五五年（宝暦五）の熊本藩校の例は他の多くの学校設置の誘因となつたといわれるが、幕府が純官立・官當学

校として昌平齋を設立、模範を示したことが、一七九〇年代（寛政）の開校ブームの一因となつたことは殆ど疑う余地がない」と述べている。

中津藩に進脩館が創立されたのは百助五歳（以下すべて数え歳）のときであり、藩の武士階級一般にも漢学の素養がようやく高まってきた。幼少の頃より学才を發揮した百助は、十代には新設の藩校にて漢学を学び成績も優れたものがあったとその交遊関係からも推定される。

文化十一年八月（二十三歳）には「父から百助備後へ遊学に付学資拝借の願、前例なしとして聞届けられず（藩記録）」と、石河幹明著『福沢諭吉伝』第一巻に記載されている。同年には備後国神辺の菅茶山は六十七歳、その詩集『黄葉夕陽村舎詩』も刊行されている。菅茶山も出仕した福山藩に隣接して中津藩の最大の飛地（二万十五石）があり、同地方の情報は中津にいても手に取るように解ったことであろう。また茶山の文名は天下に、とくに西国の諸国にはとどろいていた。

百助はその後、豊後日出（ひじ）の大儒帆足万里の塾に学び、その愛弟子の一人となつた。ただし同塾には日田の淡窓塾のような入門帳は残されていないために、その学風文風から推してそのように考えるだけである。

百助には『果育堂詩稿』（こういくどう）『霧芳閣文章稿』、およびこの二冊の詩文集に集録されていない若干の作品がある。前者は文政元年（一八一八）より天保三年（一八三二）、すなわち二十七歳より四十一歳までの詩文を、後者は天保三年より天保五年（一八三五）までの詩文をそれぞれ収め、その蔵書（拙稿「臼杵図書館蔵福沢先生遺籍解題初稿」『史学』第四十九巻第二・三号参照）とともに、福沢家の家学、家風を明かにする上で資料的価値はもちろん、漢詩文として見ても百助のもつとも充実した時期の作品であり、文政天保の詩文家の一人として評価するに足る成果を挙げている。この二冊の詩文集は自筆稿本であって、作品は年代順に自身の手で編集されている。検索の便のために作品番号を付けたが、可能な限り原著の面目を保存するように努めた。稿本における訂正箇所は、抹消した文章や文字が読者に解るよ

うな表記法をとつた。また訂正個所は、ごく一部の妥当と思われない場合を除いて、訂正した文章や文字に従つた。

百助の著作はすべて漢文で書かれているので、句読点を切り、書下し文を加え、必要な注を施した。書下し文は時代の趨勢を考慮して現代仮名遣とし、時として現代語訳も試みた。なお詩文本文の漢字の繁簡体は、稿本のままである。

これから詳述する『果育堂詩稿』（内容的には詩文集）の前にも当然習作時代が存在するはずであるが、若書きを恥じてか破棄されていて現存しない。そこで、いきなり成熟した詩風を以てわれわれの前に登場するのである。もし若書きを恥じて破棄しているとの推定が正しければ、記録性よりも詩文としての完成度により強く傾いていたことを意味する。

ちなみに文化・文政・天保の初年は、わが江戸時代の漢詩文の水準が一般社会においてもっとも高くなつた時期であり、数多くの優れた学者や文人が三都のみではなく全国各地に輩出した。とくに九州地区の水準が、全国水準を抜く形勢を示すに至つたことは注目される。百助の場合、豊前豊後および上方の学問動向との関連に注意を抜う必要があるし、大坂の町人社会や文化の様相をも視野のうちに入れて考察することも要請されよう。

もとより筆者は訳注者として充分な資格を備える者ではなく、「自伝の会」の会員諸氏の助力のもとに大過なきを願うのみである。ひろく各方面の専家の御示教を俟ち、他日の完成を期したい。

本 文

文政戊寅（文政元年・一八一八・二十七歳）

（作品番号1） 戊寅二月、門有乞食者。出而觀之、則肢體怪異、両足無指、脚腕如研槌。（「而坐行」の三字抹消）人多哀之與錢米。予因慨然有感。戊寅二月、門に乞食する者あり。出でて之を觀れば、則ち肢体怪異、両足指なく、脚腕研槌のごとし。人多く之を哀み錢米を与う、予因つて慨然として感あり。

嗟爾故鄉何處民 咎、爾が故郷は何処の民ぞ（「村」を「民」に改む）

餉口四方晨至昏 四方に餉口して晨より昏に至る

一杯藜羹不易得 一杯の藜羹すら得るは易からず（「真難」を「不易」に改む）

骨立垢面有菜色 骨は垢面に立ちて菜色あり

両手據地僅膝行 両手地に拵りて僅かに膝行す（「坐」を「膝」に改む）

宛如飛鳥鍛羽翼 宛飛鳥の羽翼を鍛うがごとし

鼈者槃跚猶為徒 鼈者槃跚として猶徒をなすも

走如黃牘豈可克 街上道遠くして進むに力なし、

街上道遠進無力

張眼舉頭幾回息 走ること黄牘のごときは豈可すべけんや

借問爾有何前因 借問す、爾何の前因かありて

天地亦生若斯人 天地もまた斯のごときの人を生ぜしや

百年孤獨無所北 百年孤独北る所なし（「身」を「獨」に改む）

無兄無弟無親姻 兄なく弟なく親姻なし

檻樓百結饑兼旬 檻樓は百たび結び饑は旬を兼たり（「御寒」を「百結」に改む）

初知人間行路難 初めて知りぬ人間行路の難

如今比爾無艱辛 如今爾に比すれば艱辛なし

憐爾百藥愈無術 憐む爾が百薬の愈すに術なきを

又恨貧家之振卹 また恨む貧家の振卹するを

皇有寛政爾勿傷

皇に寛政あり爾傷むなけれ

常下明詔及癱疾 常に明詔を下して癱疾に及ぶ

語訳

藜羹

あかざのあつもの、粗食をいう。

槃跚

槃散とおなじ。躊躇者の歩むさま。また、頬山陽の「送母路上短歌」に、「侍輿足槃跚」とあるは、よろよろ

歩むさま。

玄冬 冬の異称。冬神を玄冥といい、北方を玄天という。

愈 愈は癒すと同義か。富田正文氏の愈（いや）すに術なし説に従う。

振鈴 あわれみ恵むこと。

短評 諷喻詩のおもむきのある篇中屈指の叙事の傑作。古詩。若年のころの詩を破棄した百助は、この詩よりはじめて世に問う意志を持つに至ったようである。なお、富田氏は「初知人間行路難」のあとに、脱落があるかと疑っている。

補説 ○『福翁自伝』の諭吉の母すなわち百助の妻お順（じゅん）の中津の女乞食に対する、真宗の妙好人（みょうこうじん）とでもいうべき慈悲心に照応。中山一義氏に「福沢諭吉のみた父百助」（『哲学』第三十四輯）がある。妙好人とは中山氏の評。

○四日市に東西本願寺別院のある中津・宇佐平野は、日本で真宗のもつとも盛んな地方の一つである。中津の妙蓮寺は真宗の大寺であり、また同寺の蘭溪は広瀬淡窓の高弟。ちなみに蘭溪は文政七年五月十日咸宜園入門。その十八才子の一人に数えられ、淡窓は「蘭溪の真醇」と賦している。（淡窓「宜園百家詩」「懐旧樓筆記」）

○文政元年十一月と十二月には、当時最大の流行作家頬山陽、豊後日田の咸宜園に広瀬淡窓を訪ねる。（『懐旧樓日記』『淡窓日記卷十一下』）ときに山陽三十九歳、淡窓三十七歳。その帰途、山陽は友人の雲華上人（うんげ）を中津郊外の真宗の正行寺（じょうぎょう）に訪ね、同寺を足場にして山国川の渓谷を探り、はじめて耶馬渓と命名する。いま

は荒寺であるが、帆足万里に連作「豊前正行寺二十勝」があり、その一で「海國饒_ニ奇花_ニ 天葩正開放 何妨山塙中猶着_ニ富貴相_ニ」と詠じて大寺である。山陽滞在中に使用した部屋は、当時のままである。

○なお、淡窓の側に侍して山陽にその鬼才を知られた佐伯（さいき）の中島子玉（米華）は十八歳。『入門帳』によれば、子玉の咸宜園への紹介者は、佐伯の書物奉行で先に杵築藩に仕えていた明石秋室（大助）である。子玉は佐伯藩の下士より身を起し、のちに藩校の教授となっている。藩によつては、このような下士の待遇の仕方も豊後にはあつた。中島子玉は清の愈樾（『東瀛詩選』巻十七）が激賞。

○文政元年、百助の師である日出の帆足万里は四十一歳、ようやく蘭学にもほとんど独力で立向いつつあつた。現に日出の万里記念図書館に、使用の『訳鍵』は保存されている。万里は日出藩の上士出身。杉田玄白の『蘭学事始』は文化十二年（一八一五）の著。

福沢一族交遊関係 このころ、百助はまだ独身で部屋住の身分である。前記妙蓮寺及び竜王ヶ浜に福沢家の墓地がある。

(作品2)

春愁

しゅんしゅう

蘭閨学繡坐春深

蘭閨_ニ繡_ヲ学_びて坐_ニ春_は深_し

不向他人説苦心

他_に向_{いて}苦_{しき}心_を説_{かず}

翡翠簾前月光白

翡翠簾_前月光_は白_く一聲横笛夜沈_く一聲_の横笛_夜沈_く

語釈 蘭閨 后妃の寝起きする部屋。

繡 ぬいとり、刺繡。

短評 これは宮体系の詩。『文選』にはもちろんまだこの詩題は見えないが、宮体詩を反映した『玉台新詠集』にもない。

詩題としては六朝以降にはある。作者が後宮の女主人公の立場をかりて、自分の胸中を吐露している。繡とは百助自身の学問のことであろう。閉ざされた環境にあって、才を抱きながらいたずらに過ぎて行く日々。勉学時代には身分社会からやゝ脱したかに待遇されたらうが、再び嚴重なる身分社会に戻されての感慨である。今や再び部屋住みの下士に過ぎない。

現代語訳

針のすさびに物思う春の日々

この胸のうち打明けるべくもない

宮居深く月光は白く

だれが吹く横笛か夜の静けさに消える

(作品3)

秋興

秋興

蕭瑟三秋晚 蕭瑟たり三秋の晩

金風至自西 金風西より至る

天高山月小 天高くして山月ほそ小ぐ

野曠塞鴻迷 野曠くして塞鴻迷う

疎懶任人潤 疏懶人の潤まじわにするに任す

間愁待酒携 間愁酒を携たずえるを待つ

鷦鷯何所托 鷦鷯何の托する所ぞ

幸有一枝栖 幸にして一枝の栖あり

語釈 三秋 秋の三ヶ月、すなわち秋におなじ。

金風 秋の風。五行思想で秋は金にあたる。

澗 澗は闊の俗字、久しく逢わないという意味もある。ここでは間遠にすると読んだ。

鷦鷯 みそをさい。

鷦鷯何所托 幸有一枝栖の両句は、鷦鷯巢於深林不_レ過一枝。(『莊子』逍遙遊)に基く。みそをさいは、深い森のなかに巣を営むけれども、実際に巣作りに使うのは、わずか一枝だけである。転じてその分に安んずべきであるとの喻えとなつた。

短評 この詩には、高い志を抱きながら、それを満されざる者の心情があざやかに描かれている。天は高く野は曠いのであるが、それを照らす山月は小さく、塞鴻もいたずらに迷う。つまり自分を評価してくれる有力者に比せられている山月は小さく、かれ自身を表わす鴻(おおとり)は迷わざるをえない。これらの句には作者の心象風景が托されており、竹林の七賢の代表詩人阮籍の「孤鴻号外野、翔鳥鳴北林」(詠懷錄)が連想される。

そして結びの二句の故事も、阮籍たちが信奉した『莊子』が出典である。現実の壁にぶつかり、自分を慰めて納めているが、百助はもともと老荘系の思想家ではなく、儒者であるはずである。士大夫である中国の詩人たちも、身の不遇をかこつ詩では、隠者の発想にやゝ接近するのが常である。

(作品4) 聞雁

雁を聞く

忽有南翔雁 忽ちにして南翔の雁あり

遊人歎索居 遊人索居を歎す

天衢高鼓翼 天衢高くして翼を鼓ち

木葉落傳書 木葉落ちて書を伝う

行陣秋風外 行陣秋風の外

哀鳴曉夢餘 哀鳴曉夢の余

郷關何所 郷關いす何れの所にか〔在る〕(「處」を「所」に改む)

夜月半山虛 夜月半山むな虚し

語釈 索居 友人と交際せず離れて居ること。

短評 五言律詩の仄起の形式に従つてゐるのに、第七句のみ四字句となつてゐるから、一字補う必要がある。たとえば「在」を入れれば、「郷關何处在」とあり形式が調う。李白「青樓何所在 乃在碧雲中」(寄遠第一首)。「故郷在何許」「故郷渺何處」「故園在何處」(後の三例『漢詩大觀』)この個所は近藤光男氏の御教示を受けた。

さらに富田正文氏は、郷關何处在 夜月半山虛の平仄を示して、在は第五字目に入ることを指摘している。

補説 全体に漢の名臣蘇武の故事を踏える。匈奴に使いして抑留十九年、雁の脚に手紙を結びつけて漢と通信し、つい帰

国した。(『漢書』蘇武伝) また、蘇武の名に仮託した古詩は、『文選』雜詩第二十九卷に見える。

百助にやゝ遅れる藤井啓、号は竹外(一八〇七—一八六六)の絶句「聞雁」も同じ故事を踏える。中国でも、ごく普通な連想である。

(作品5の一) 送櫻温夫之筑

桜温夫の筑に之くを送る

福沢百助著『果育堂詩稿』(一)

梧桐葉落扇城秋 梧桐葉落ちて扇城の秋

有客西征不少留 客あり西征して少くも留まらず

別後望郷臺上眼 別後望郷台上の眼

肥雲筑水總離愁 肥雲筑水^{すべ}離愁

梧桐葉落扇城秋 勉学のため他郷に出る友人を送る詩である。朱子の「偶成」少年易老学難成…階前梧葉已秋声。の絶句が、当然意識に上っていよう。ただし「偶成」は朱子の真作かどうか疑問もある。

扇城 中津城の異称。その城域がほぼ扇状をして三角であるところから名付けられた。中津の碑文集に『扇城遺文』がある。同書に百助の「中村寿山墓誌銘」が載っている。中津淨安寺に墓碑現存。また帆足万里の「福沢生恵酒」にいう。

扇城美酒比_ニ中州 贈_レ我一樽能解_レ憂

夜雨春垂行可_レ剪 幽情不_レ入_ニ郇公厨 〔帆足万里先生全集〕西庵先生余稿

その師万里に中津の地酒を贈った主は、いうまでもなく百助である。

望郷台 台の名。漢の成帝の將軍王潁、隋の蜀王秀にそれぞれ望郷台がある。

初唐の四傑の一人王勃の「蜀中九日詩」にいう。

九月九日望郷台 他席他郷送_レ客杯

人情已厭南中苦 鴻鴈那從_ニ北地_ニ來

福沢一族交友関係 桜温夫 桜は桜井。桜井家は上士から下士まで中津藩に数軒ある。(『中津藩士家譜』亨保七年版)

河北辰生氏いう、福岡藩の龜井塾へ遊學か?帆足塾との関係からいえば、この可能性が強い。万里はよく龜井塾出身の淡窓を紹介者として、自分の弟子を龜井塾に送りこんでいる。

(作品5の二)

秋雨初肥新浦鱸

秋雨初めて肥ゆ新浦の鱸

何為匹馬上征途

何の為にか匹馬征途に上る

懸弧有報無嗟歎

懸弧報するあるも嗟歎するなく

探去驪龍領下珠

去りて驪龍領下の珠を探ぐれ

語釀 鱸

鱸はスズキ。盛夏から初秋の頃に美味。中山義秀は絶筆『芭蕉庵桃青』で、「隅田の長江に鱸のおどる、初秋

の季節となつた」から筆を起している。『正字通』に「吳江松尤盛」とある。

中津は海辺の町、この時期のスズキと冬のフグは名高い。清末の詩人で駐日公使（発令のみ）黄遵憲の『日本国志』卷三十九物産志二にも、「豊前国物産：鱸、筑城郡松江浜」とある。

松江といえば出雲松江のスズキの奉書焼は、穴道湖の冬場の脂ののつた腹太スズキを使用していて旬が普通と違う。『晉書』「張翰伝」に齊王竦が秋風とともに呉中のスズキを想い、高位を捨てて帰郷したとある。日本と異種。懸弧 富田正文氏いう、男子の誕生を意味し「男の子が生れたとの知らせがあつたが、その知らせを後にして旅立たねばならぬことを嗟くなの意味になる。」

驪龍領下珠 驪龍は黒竜。この竜のあごの下にある玉。この玉を手に入れるのは命がけである。長崎の祭りの竜のおどりは、これを様式化したものである。

(作品5の三)

陽閏曲闋水之涯

陽閏の曲は闋る水の涯

万里秋天雁字斜

万里の秋天雁字斜なり

殷慤為問帰鞍日

殷慤為めに問う帰鞍の日

及見東籬黃菊花 見るに及ばん東籬黃菊の花

語釈 陽関曲 陽関は敦煌の西南にあり、この関所を出れば一路西域へ通する。中国本土のさいはての地である。陽關の

曲は、唐の王維の送別の詩「送元二使安西詩」を指す。転じてひろく送別の詩を意味する。

關 関は門を閉じる。いこう、やすむ、尽きるの意味がある。この個所の読みは富田正文氏に従う、『文選』第三

十一卷顏延之の「待宴」に「樂闕延皇脣」（樂闕りて皇脣を延く）とある。

短評 この連作の送別詩は、作者の人柄を反映した真情の溢れた篤実な作風である。読者の意表を突くような新奇な文字に富むわけではないが、相手の志望が首尾よく遂げられることを念願して過不足がない。才子の詩ではなく温雅な君子のそれである。

(作品6)

蘭贊

らん
さん

楚騷制佩 楚騷佩を制り

鄭穆兆夢 鄭穆夢を兆う

瑤臺月桂 瑶台の月桂も

香難伯仲 香伯仲たり難し

語釈 楚騷 楚辭の別称。屈原作「離騷」は楚辭を代表する傑作で、三百七十五句から成る抒情的叙事詩である。

制佩 「離騷」に謂「幽蘭其不可佩」（幽蘭は其れ佩ぶ可からずと謂う）とある。佩はおびだまの意もある。

鄭穆 鄭の文公と穆公にまつわる夢蘭の故事。『左伝』宣公、三年の項に「鄭文公有賤妾曰燕姞。夢天使与己蘭曰、余為伯鯀、余而祖也。以是為而子。以蘭有國香、人服媚之如是也。既而文公見之、与之蘭而御之。辭曰、妾不才、幸而有子、將不信。敢徵蘭乎。公曰、諾。生穆公、名之曰蘭。こうして生れたのが穆公であり、文

公は穆公に蘭と名付けた。

瑠台 美玉で飾つて四方を眺望するための建物。たまのうてな。

月桂 月中にある桂の木。また科挙の試験に及第すること。

補説 ○これは詩ではない。贊の三体のうちの雜贊に属し、もっぱら称揚する際に用いる文体である。

○「離騷」中の「朝飲木蘭之墜露兮 夕餐秋菊之落英」（朝には木蘭の墜露を飲み 夕には秋菊の落英を餐う）

藤野岩友著『楚辞』（『漢詩大系』3）ページ35にいう。「前二句は古今の名句とされる。屈原の高潔澄明な心境の象徴というべきである」

文政己卯（文政二年、一八一九、二十八歳）

（作品7）

東上舟中作

東上舟中の作

雄風千里至 雄風千里より至る

捩挽破奔濤 捣挽^{れいな}奔濤を破る

去国九州遠 国を去りて九州遠く

披雲八鳴高 雲を披^{ひら}きて八鳴^{やしま}高し

人逢巻綃客 人は巻綃^{けんじょう}の客に逢い

水出戴山鼈 水は戴山の鼈を出だす

極目船窓下 極目船窓の下もと

傾杯興益豪 杯を傾ければ興ますます豪なりさがんなり

語訳 摠挖 摳ねじる、挖ひく。いずれも舵の操作。

八嶋 八嶋は高松郊外にテーブル状に聳える屋島を指す。源平の古戦場。律詩では第三句と第四句は対句にする必要があるから、屋ではなく八の字を選んだ。

紺 きぎぬ。巻紺で紺をまとった富人のこと。

水出戴山鼈 水面より聳える亀の形をした島の描写であろう。第五句、第六句は日出たきもので対句を構成する。

この個所も律詩では対句にしなければならない。

短評 これは大坂の中津藩蔵屋敷に赴任する道中ではない。なんらかの機会を得て、はじめて上方におもむく百助は、舟

中意氣軒昂たるものがある。躍動する思いが一語一語に溢れている。『福沢全集』第二十一巻の福沢家系図によれば、まだ家督前の百助ははじめて藩庁に出仕している。すなわち、

文政二年己卯七月、被召出二人扶持頂戴、御用所御取次、

同八月、郡方御勘定人、

とあり、この事実とどのように関係するのかは今後の課題である。

現代語訳

風は吹く千里の彼方より

面舵取舵 濤なみを破って進む

いまは遙か 九州の日々

雲を披いて八嶋の嶺

お蚕ぐるみの商人も相客で

亀のような形の島影

すべてが心のひろがり船窓のひろがり

飲むほどにいや増すわが元氣

(作品8)

望赤穂城

赤穂城を望む

赤穂城東望浩洋 赤穂城東浩洋を望めば

碧波粉壁帶斜陽 碧波粉壁斜陽を帶ぶ

忠肝義膽今安在 忠肝義胆今^{いすべく}安にか在る

帰鳥呼風度夕蒼 帰鳥風を呼びて夕蒼を^{せきそう}度^{わた}る

詰訳 赤穂城 「忠臣蔵」で名高い浅野長矩（五万三千石）の旧城。その後、永井氏を経て当時の城主は森忠敬（二万石）。（『藩史事典』）

粉壁 しら壁

短評 赤と碧と粉と、その対照の妙によつて、色彩的効果を生んでゐる。ただ詩語としては「帶斜陽」と「度夕蒼」が、

やゝ近すぎるような印象を受ける。結句はもう少し離れた別な表現が好ましい。

補説 ○これは荻生徂徠系の意見ではない。このころ徂徠学の体系は長州の山県太華を経て北九州に定着し、龜井門においては比較的純粹に保たれていたが、その他の諸藩ではかなり事情が異なる。

○「程朱の註を用いて書を講ずる人の許へは通うものもないといわれた朱子学衰退の風潮のなかにあつても、幕藩の教育ではやはり林羅山や木下順庵以来の朱子学の伝統が根づよく続いていたのである。そしてこれとは逆の事情が、寛政異学の禁以後の事態についてみられる。化政期ではなお折衷学派や徂徎学派の活動の余地は残されていたのである。民間の儒学界においてはその余地はより大きかった。（衣笠安喜「儒学における化政と寛政異学の禁との関連」）

『化政文化の研究』所収 岩波書店)

○中津藩の状況は和島芳男著『昌平校と藩学』(至文堂)の次の叙述によつてほぼ窺われる。「寛政二年(一七九〇)五月いわゆる異学の禁。……寛政八年奥平昌高創立の豊前中津藩進修館ではその学規に“經義は朱注を宗とし、兼ねて古注を用うべし、異説を以て紛乱すべからず、ただし深造、自得、卓異の見所これあり候わばこの限りにあらず”と載せ、公然自由解釈の余地を残した」

○『大分県教育百年史』第一巻では、奥平藩の儒学を述べて朱子学から古学への系譜を説き、仁斎・東涯の学統および徂徠学の学統の強いことを述べる。そして遅れて万里学の影響も現れ、周辺地域と比べてかなり独自の学問が伝つたことを説く。

○文政二年『〇二』、亀田鵬斎、泉岳寺に赤穂四十七士の碑を建つ」(斯文会編『日本漢学年表』) 鵬斎は江戸の民間学者で折衷学派。文政九年三月歿(七十五歳)

○百助の立場は当時の義士觀に、特に異を立てるものではない。

(作品9)

淀川舟中即事

淀川舟中即事

長堤百丈挽舟行

長堤百丈挽舟の行

十里蘆風月影清

十里の蘆風月影清し

道入京畿人語換

道は京畿に入りて人語換り

夢帰豊國客心驚

夢は豊の国に帰りて客心驚く

霧中樓閣知天近

霧中の樓閣天に近きを知り

雲外山峯覺地平

雲外の山峯地の平なるを覺ゆ

喜び懸弧男子志 喜び懸弧に報ぜん男子の志

蓬窓拭目待黎明 蓬窓目を拭いて黎明を待つ

語釈

挽舟 淀川筋の上りの舟行で舟に縄をつけ、陸上からひっぱる方法が江戸時代には採られていた。

人語換

京ことば、大坂弁など上方のことばに変った。

豊国 豊前・豊後から成る。豊前の大部分は福岡県に、中津を含むその残りは大分県に編入された。豊後は全部大分県に編入される。「前後の豊」「両豊」「双豊」などとも、万里や淡窓は呼んでいる。現在、大分市で料亭を営むもと幕内力士豊国は、もちろんこの地方の出身である。

短評

はやくも望郷の詩人の一端が現れている点は、注目される。

補説

即事…その場のことを直ちに詠ずる詩題。

(作品10)

己卯(卯)初夏、余將遊京前、一夕、森君則自東武至、遂不得相見。已寓京邸、岑寂無聊。賦一絕寄。

己卯初夏、余將に京に遊ばんとする前の前、一夕、森君則ち東武より至れるも、遂に相い見るを得ず。已にして京邸に寓し、岑寂無聊たり。一絶を賦して寄す。

送君龍渚四經春

君を龍渚に送りてより四たび春を経たり

龍渚君帰我問津

龍渚より君帰り我れに津を問う

無奈萍蹤無住着

無奈せん萍蹤して住着するなきを

天涯長作夢中人

天涯長えに夢中の人と作る

作字頭記により補入

語釈

東武 江戸を指す。

京邸 京都の中津藩邸。

福沢百助著『果育堂詩稿』(一)

岑寂 さびしきこと。寂しげに高く聳えること。

竜渚 中津郊外竜王ヶ浜。藩士の墓地のある一帯のさらに先、山国川河口に港があり、中津藩関係者はもちろん、日田の人びとも同港より瀬戸内海を経て上方に旅立っている。

また文化九年（一八一二）に六十五歳で亡なつた中津藩儒倉成竜渚の名も、ここでは踏えられている。倉成竜渚は藤田貞一（中津藩儒で三浦梅園の師）伊藤東涯に師事し、詩文を以て一家を成した。小川貫道『漢学者伝記及著述集覽』参照。『梅園詩集』卷之下に「贈魚倉龍渚」の七絶あり。

短評 普通、絶句のような短詩形には同一語の使用は避けるのであるが、ここでは同一語使用の効果をねらつてゐる。

「送君竜渚」と「竜渚君帰」の語順の面白さと、数年前に亡くなつた倉成竜渚への連想作用が働いてゐる。森氏は竜渚に師事したことがあるのかも知れない。

福沢一族交遊関係 河北展生氏によれば、森君とは森深平（典章）二百石取りのことであろう。森深平は、文化十一年学館管理を命ぜられ、文化十三年江戸在番、十四年もひきつづき在番、文政二年に帰国し、三年に出府してゐる。

現代語訳

竜王ヶ浜に送つて四たびの春

君 竜の港より帰つて学の渡し場を問う

この身浮草のように落着き先とてなく

無限の空のはて 夢中の人となる。